

# 令和7年度 第2回 学校運営協議会 議事録

## 1 概要

- (1) 日 時 10月20日(月)午前10時から正午まで
- (2) 場 所 コミュニティルーム
- (3) 出席者 学校運営協議会委員、学校職員
- (4) 議 題
  - ア 前期学校自己評価について
  - イ 初めて卒業生を送り出す学校の取組

## 2 議題ア 「前期学校自己評価について」

- (1) 学習環境と安全確保  
学習環境は概ね良好と評価されたが、令和9年度に生徒数増加が見込まれるため、物理的スペースの確保が課題。今後も東高校と連携し、特別教室等を活用して環境の質を維持・向上させる方針。
- (2) 生徒の主体的活動と自治的能力  
生徒会活動における主体性は改善の余地があり、主に「活動時間の確保」と「計画・実行面での支援」が必要とされた。
- (3) 「主体者」意識の育成  
生徒の「主体者」意識の理解が不十分という課題がある。対策として、生徒が来客者に学習内容を説明する機会を設け、当事者意識と責任感を育成している。
- (4) 教職員の協働性と職場環境  
「心理的安全性」を重視した職場づくりが評価されている。今後も教職員間のコミュニケーションを促進し、協働的で働きやすい環境を目指す。
- (5) 地域連携と学習機会の充実  
清掃活動や地域行事への参加など、地域と連携した学習活動が実施されており、生徒の知識・経験の拡充に成果を上げている。

## 3 議題イ 「初めて卒業生を送り出す学校の取組」

- (1) 学校からの現状報告と課題認識（3年主任）
  - ・ 年間キーワード：今年度は「ホスピタリティ（他者への思いやり）」と「無敵（誰にでも感謝を伝えられる精神的な強さ）」をキーワードに、人間性の育成に力を入れている。
  - ・ 生徒主体の新たな取り組み：生徒の興味・関心に応じて講座を選択する探求の時間を設けたほか、卒業に向けて生徒が主体となる3つの実行委員会（アルバ

ム、イベント、卒業制作)を立ち上げ、自主性を育んでいる。

- ・ 進路状況：現時点で、約3分の2が企業就労を、約3分の1が福祉就労や職業訓練を希望している。
- ・ 目標：生徒たちが卒業後、円滑に社会生活へ移行できるよう、他者への思いやりやコミュニケーション能力をさらに高めていくことを目指す。

## (2) 委員からの助言と意見交換

(A委員) 「社会で学ぶことは社会でしか学べない」という前提に立ち、卒業までにすべてを教え込もうと焦る必要はない。生徒にはまず、友人との交流など充実した学校生活を送らせることが最優先である。学校と保護者に求められるのは、卒業後に生徒が困難に直面した際に助けを求められる支援体制(セーフティネット)を準備すること、そして保護者自身が過干渉を控え、家庭を心安らぐ休息の場と捉える「子離れ」の意識改革に取り組むことが重要である。

(B委員) 我が子は困難な職場実習で、精神的に落ち込みながらも最後までやり遂げた。また、自転車で転倒した際には、親に頼らず自力で応急処置を済ませた。これらは単なる自立の証明ではなく、学校教育がもたらした確かな成果である。保護者自身が不安を乗り越え、子どもの成長を信じて見守る「子離れ」へと向かうようにしたい。

(C委員) 東高校が実施したアンケート結果では、分校生徒との交流を通じて、東高生が抱く特別支援学校へのイメージが「無関心」から「明るい、親しみやすい」といった肯定的なものへ劇的に変化したことがデータで示された。この交流は、①生徒の社会性・人間性の成長、②共生社会の実現に向けた具体的な前進、③学習意欲の向上、④人生観への好影響という4点において、両校生徒にとって大きな人間的成長の機会となっていると分析された。今後のさらなる交流深化策として、生徒発案による昼食を共にできるコミュニティルームの開放にも取り組みたい。

(D委員) 多くの地域で指導者層の平均年齢が65~70歳に達するという高齢化が進む中、地域づくりの担い手として若い世代の参加が不可欠である。これは地域の未来を左右する喫緊の課題である。卒業生に対しては「地域は若者を待っている」と伝えてほしい。また、卒業後は居住する地域の活動(町内会行事など)へ積極的に参加してほしい。

(E委員) 他者理解と自己理解を深めることが大切。互いの長所を伝え合う「褒め褒めシャワー」が効果的で、「何の利害もない人に言われた一言」が親からの言葉以上に深く響き、自己肯定感を育む上で極めて有効である。加えて、「失敗は成長のチャンスである」という考え方や、自分の人生の答えは自分自身で見出すという「自己決定」も重要である。